

紫紺の海・カツオの海

カツオの始原伝承をめぐって

Blue-violet and Bonito Seas : Legends of the Origins of Bonito
KAWASHIMA Shuichi

川島秀一

はじめに

黒潮はフィリピン沖から北上して日本列島のそばを動く、約1万キロの長さの、世界でも稀有な海流である。列島に近づくと、岬などに当たって多くの渦を生じ、その黒潮の渦はプランクトンなどの生息する豊かな海流になる。この黒潮に乗って南方からやってくるのが、「黒潮の子」と呼ばれるカツオである。

そのカツオ（学名 *Katsuwonus pelami*）の語源は、江戸時代に伊勢貞丈（1718～84）により「カタウオ」の略名として、かつお節が堅い加工品であることから生まれたという説を出している。

しかし、渋沢敬三は『日本魚名の研究』（1959）のなかで、次のように述べている。

本来はカツまたはカツオなる一次的魚名が漁民団において呼ばれ、この製品が京師へ持ち運ばれ、カツまたはカツオなる一次的魚名の音と乾燥された製品の性状とから巧妙にも堅魚なる⁽¹⁾当て字をしたと考える方が更に妥当であるとも考えられる。

渋沢によれば、カツオも「一見意味の通じない魚名」のことを指す「一次的魚名」であり⁽²⁾、その後、具体的な「かつお節」の性状から付会され、呼ばれ始めたのではないだろうか、製品起源説に疑問を投げかけている。

ただ古代から人間の生活と関わりの深かった魚類であることに相違なく、神話的な始原伝承の中にも散見される。本稿ではこのカツオの神話的な伝承に焦点を定め、そこからカツオにまつわる、さまざまな伝承や漁業技術との関わり、漁師たちの生活や信仰を浮き彫りにすることで、人間と海の生物との関わりや、その自然観を考える素地を提供しておきたい。

一方では、韓国でそのような先駆的な方法で歴史や民俗を描いたイシモチ（学名 *Pennahia argentata*）の研究書がある。朱剛玄の『^{ジュガンヒョン}黄金の海・イシモチの海—韓国西海岸歴史民俗探訪』⁽³⁾（1998）である。韓国の西海岸を北上するイシモチと、日本の東の太平洋岸を北上するカツオでは、その伝承も漁法も相違するが、同様の回遊魚を東アジアの人間たちは、どのように迎え入れたのか、その比較と共通点にも少しだけ触れたい。

船に飛びこんだ魚—カツオの生食起源譚

先に触れたように、カツオという魚名の由来を早くに取り上げた伊勢貞丈は、その『貞丈雑記』(1763～84)のなかで、次のように述べている。

かつをと云魚は古はなまにては食せずほしたる計用ひし也ほしたるをもかつおぶしとはいはずかつをと計いひしなりかつをはかたうを也ほせばかたくなる故也かたうを、略してかつをといふなりされば古は堅魚と書てかつをとよみしを後に鰹の字を作り出したる俗字なり朝鮮國にては松魚と云也(松のひでの如く肉の色赤き故なり)⁽⁴⁾。

カツオの語源もさることながら、「朝鮮國」にも「松魚」というカツオの表記があったことにも関心が惹かれる。ここでは、「かつをと云魚は古はなまにては食せず」という、カツオの生食に関わる発言である。おそらく、この根拠となる文献は、カツオについて論じるときに、必ずといってよほど引き合いに出される、吉田兼好の『徒然草』(1332～38)であり、その「第百十九段」の、次のような叙述である。

鎌倉の海に、鰹といふ魚は、かの境にはさいなき物にて、此比もてなす物なり。それも、鎌倉の年寄りの申侍は、「此魚、をのれらが若かりし世までは、はかへしき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍し物なり」と申き。

かやうの物、世の末になれば、上ざままでも入立つわざにこそ侍なれ。⁽⁵⁾

兼好法師が記した、このカツオの生食の時期についても、その後、いろいろな論評が現れた。「『徒然草』の一文を真正面から解釈しないで、その裏にこの当時わがもの顔に振る舞っていた武士に対する、カツオに名を借りた痛烈な風刺が潜んでいるとの見方をとる人々もいる⁽⁶⁾」ともいう。

しかし、このカツオは当初は生(刺身)で食べなかったという言説は、広く人口に膾炙されていたようである。しかも、ある神話的な人物による賞賛によって、それを人間が食べるようになったという説話は、古文献から民間伝承まで目にし、あるいは耳にすることができ得る。

たとえば、千葉県南房総市千倉町の高家神社^{たかべ}の祭神は「磐鹿六獨命」であるが、「高橋氏文」によると、景行天皇が上総国に行幸のとき、六獨命がカツオを「古は毒ありとて食せず専ら干し堅めて食せり」と語って、天皇にカツオの刺身を献上したところ、おいしく召し上がり、六獨命は宮中の大膳職の長に命じられたという。料理の神様にもなった「磐鹿六獨命」の神像の掛軸は、現在、高家神社が所蔵するが、近年になってから作られたものであり、同神社の包丁式に、かつては下げられたという。そこには、ミサゴの上に乗って、右手にハマグリ、左手にカツオを抱いている祭神の姿が描かれている(写真1)。

このような、カツオの刺身を食べるようになった由来譚は、口承の世界でも聞くことができる。たとえば、宮



写真1 掛軸に描かれた「磐鹿六命」
(高家神社所蔵, 2018.2.27)

城県気仙沼市小々汐の尾形栄七翁（明治42年生まれ）は、次のようなカツオの命名譚を伝えていた。

カツオは神魚と言って、神様の魚なんだって。人が食^かんねもんだったつ。人が食うと腹さあたんだった。それを神功皇后様、戦に勝って帰って来るとき、その船さ飛び込んだつ。そしたれば、「ああ吉相な魚だ。俺が勝って凱旋する船さ飛び込んだから、オメを〈勝つ魚〉とする」と言った。そしたらば、腹さあたんねで食れだった。それから、カツオって言うんだつ。（1989年12月3日採録）

カツオの生食の起源を「高橋氏文」では景行天皇、尾形翁の語りでは神功皇后に絡ませている。しかも、尾形翁の伝承では、それが同時にカツオ（「勝つ魚」）の命名由来譚にもなっているのである。

船に飛びこんだ魚—カツオ縞の由来譚

ところで、カツオの命名由来譚のほうは、神功皇后伝説だけでなく、源頼朝伝説にも見られる。しかもこの伝説では、カツオは次のように「源氏の守り神」として捉えられているのである。

源頼朝が石橋山の戦に敗れ、真鶴から房州へ逃れたとき、帆走する船のオモテに一尾の魚がはねて飛び込んだ。頼朝の前に持っていくと、頼朝は側にあった硯を引き寄せて、それに指をつけて魚に平行線をぐっと引いた。そして「これはよい縁起である。今は逃げていますが、やがてはきっと勝つ。この魚を以後カツオと呼ぶように」といって魚を逃がしてやった。以来カツオの横腹には五本ほどの黒い縞がついている。そしてカツオは源氏の守り神になった。オブリは大抵カツオだし、オブリを鎌倉の八幡様へ持っていくのもそういう関係があるからだ。⁽⁷⁾

前述した尾形翁の語りと同型のカツオの命名譚であるが、この話では、カツオの生食の起源ではなく、カツオが釣り上げられてからの特徴である、腹の縞の由来に絡ませている。カツオの縞模様は、水揚げされてから生じるものだが、静岡県の焼津では、カツオ一本釣りの漁師たちが、縞のシャツを着用することが誇りだった時代があり、「縞」はカツオを象徴するものでもあった（写真2）。この縞のことを「カツオ縞」とも「焼津縞」とも呼んでいた。また、オブリとは「一月から五月までの間に、相模湾のどこかに必ず一尾カツオが打ち上げられることがある⁽⁸⁾」と伝えられる「寄りもの」の縁起物のことである。

船に飛び込むカツオを縁起物としたのは源頼朝だけではない。戦国期の北条氏綱にも、次のような同型の話が付会されていた。

天文六年（一五三七）の夏、小田原浦近くの釣り船が多く浮かび、鰹を釣る。これを、北条氏綱が聞こし召し、小舟にお乗りになり、漁師の仕事をお見物になり、珍事の御遊びにお楽しみになっているところに、鰹が一匹船へ飛び込んだので、氏綱



写真2 カツオ縞のシャツ
（焼津市の「なんぼん記念館」所蔵, 2017.4.5）

はお喜びになり、勝負に勝つ魚とお喜びの言葉は並大抵ではない。すぐに、酒肴にお使いになった。そうしたところ、同じ七月上旬、上杉五郎朝定が武州へ発向したと告げてきた。氏綱は出陣し、同十五日の夜軍に、氏綱が打ち勝って武州を治めなされた。その頃は、四方に敵がいて、毎日の戦い止むことがなかった。氏綱が賞翫された鰹は、勝負に勝つ魚ともてはやし、常に用意し、諸侍が戦場に門出の酒肴には、鰹を専ら用いなされた。「北条五代記」卷之七 四 東海にて魚貝取り尽くす事付人魚(10)の事)

ところで、このカツオ縞の由来譚は、広くカツオ船の漁師たちを通じて伝わったものと思われる。福島県いわき市江名もカツオ船の基地であったところだが、江名の高木武雄翁（明治33年生まれ）は、次のような話を伝えている。

昔、なんだっちな。名前忘れちゃったけんとも、なんとかといた偉え侍がなんのかのはずみで、手で鰹のはらすんとこ、引いたんだと。それからっちゃ鰹のはらす、手の跡ついて線になっちゃってるわけ。鰹のはらす焼いて食うと、うめえかんねえ。(9)

カツオのことを英語で bonito のほかに skipjack があるように、その飛び跳ねる特質を捉えた伝説が、カツオの生食の由来やカツオの腹の縞模様の由来などに絡ませながら広く伝えられていたものらしい。さらに、その「釣る」という漁法にも、起源伝承が作られていた。

擬餌針の起源伝承

前述した景行天皇には、もう一つの伝説がある。天皇が安房の浮島に船で戻られるとき、船尾をたくさんの魚が追いかけてきた。試みに弓の角弭つのはずをその群れの中に差し入れると、たちまちに食いついてきたという。角弭とは、弓の端に弦を付ける部分で、先端の鹿角部分が爪型になっている。鹿の角でカツオを釣るようになったのは、このような由来によるという。

また、「高橋氏文」では磐鹿六獯命の話になっていて、船で安房にある浮島を目ざしているとき、船尾を群れになって追いかけてくる魚があったという。試みに六獯命が角弭を群れの中に差し入れると、たちまちに喰らいついてきたという。それが、鹿の角を用いるカツオ漁の起源だという。

一方で「三島大明神」（三島大社）の縁起にも、類似した神話が載っている。三島大明神が丹波の海から船出して、船首にいたときに、あやまって法華経八の巻を落としてしまった。それを弓弭ゆはず（角弭）でかきよせて取り上げようとしたら、その角弭にカツオが食いついてきたので船中に投げ込んだという。初めのうちは大明神しか、そのような方法でカツオを釣ることができなかったが、後ほど人々にその力を与えるときには、鹿の角に金を細く伸ばして曲げ入れ、麻糸の先に結びつけることを教えたという話である。(11)

いずれも、現代のカツオ漁でも用いられているツノと呼ばれる擬餌針の起源譚である。ツノは船頭やヘノリなどの技術の優れた者が、三島大明神がいたという同じ場所である船首にいて、そこからカツオを釣るときに用いる擬餌針でもあった。

いわゆる、カツオ漁の特徴である「角釣り」の起源譚であるが、同型の話は口頭伝承として、どのように伝わっているだろうか。たとえば、神奈川県鎌倉市腰越での伝承では、擬餌針は濡れてから色が変わるものが良いとされ、山で使う駄馬が傷めている血の混じった蹄(12)が良いとされた。とくに小田原に昔からよいツノ（蹄）が見つかったといい、次のような由来譚が伝承されている。

昔小田原の殿様のお馬に、イチジロという栗毛の馬があった。四つ足のうち、一本だけ毛並みがまっ白で、とてもよい馬であった。馬方が川へ連れて行って洗ってやると、魚が沢山集まって来て、ことにその白い足のところへつくのだった。ふと通りがかってそれを見た腰越の漁師が、すきをうかがって斧でその白い足を、ずばり切り落して逃げた。漁師はその足のひづめから、擬似餌針のツノを作って魚を釣った。それは法外によいツノで、オメイロ（沢山）魚が釣れたので、外の漁師が釣をやめて、その男を取り巻いて見ていたほどであった。その漁師はツノのことをだれにも話さず、ひたすら隠していた。

さて一つのひづめからは、三つのツノしか作ることができない。そしてそのツノは大変魚の食いがよかったので、どうしても魚に取られてしまい、とうとう最後の一つになってしまった。最後の一つを、きわめて大切にしていたが、ついにそれも取られてしまう時が来た。その漁師は思わず大きな声で、「ああ、イチジロをとられてしまった」と叫んだ。そのため、その男の仕業が知れてお仕置きになったという。以来腰越の漁師の間では、格別大切にしている、よいツノを「これはおれのイチジロだ」というようになった⁽¹³⁾。

一方で、岩手県大船渡市三陸町根白^{こんぱく}の寺沢三郎翁（大正2年生まれ）は、父親の助太郎翁（明治15年生まれ）から、次のような話を聞いている。

昔の話では、こういうふうに関父から聞いたんだけんとね。船頭というものは、「段の上」という、船の舳先で一段高くなっているところにいるもんですよ。こっから見はりつけると、必ずカツオが見やすいもんだから、沖で漁が終わって、大漁して、いよいよ港に入るときでなければ、この段の上から降りねんですよ。

そして、あるときデキヨウ釣り（底にいるカツオを水面上に上げる釣り方）をやったわけ。ドウマワリ（小使い役）が、活きた餌を一本ずつ撒いて、そしてカツオが集まってくるの待ってるとき、これをやってるときは、船頭が仕事ねえわけだ。そのときは、鏡のような、きれいなナギだったらいいですね。そして、船頭の後ろにカツオが来てポツンポツンと跳ねるといふ状態があったらしいですね。何か変だと感じた人があったらしいですね。「何して船頭の前ではなくて後ろの方でばかり跳ねるんだか、ちょっと感じがわかんね」というごとでね、漁師の人たちが不思議に思ってたわけ。

そしたらね、その船頭がドウラン（煙草入れ）が落ちねえように、帯のところにヒッパサミでふりおさえて、はさんでだったらしい。ヒッパサミは、鹿の角さ穴をつけたものだが、ナギがいいもんだから、鏡のように海がおだやかだったわけだから、船頭がヒッパサミ、はさんでた姿というの、海さすっきり映ってるわけ、その映ってる姿にカツオの好きな角が見えたわけなんだ。そのために飛びついてるわけだった。それが土台でね、カモシカの角を使ったというわけ」（2001年1月27日採録）

このカツオの角釣りの由来譚では、船頭の尻に下げていたヒッパサミ（写真3）の角にカツオが集まったことが機縁となったようである。疑似餌ではなく、イワシの活餌^{いきえ}を戦略的に用いた新しい方法は、中世以後に紀州で生み出されたものである。その「溜め釣り」という漁法は、カツオを大量に捕獲する上で飛躍的に前進させた。

また、三島大明神もこの昔話の中の船頭も、ミヨシ（舳先）に居たことが共通しているが、この

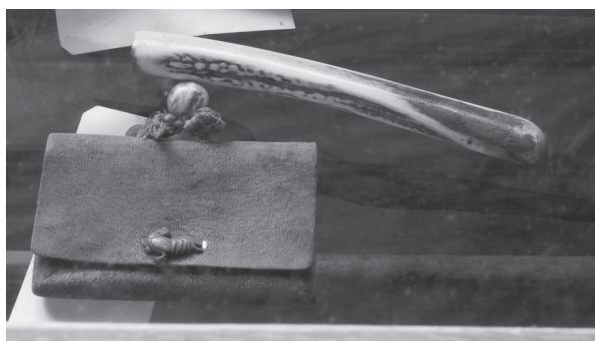


写真3 鹿角のヒツパサミを付けたタバコ入れ
(八戸市鮫町の重要有形民俗文化財「浜小屋」所蔵, 2015.11.6)

一段高くなっている場所は、和船時代には「エビス棚」と呼ばれる神聖な空間であった。今でもここにタツと呼ばれる、陸とつなぐロープを巻く小柱があり、三陸沿岸では、機械船になってからは、このタツの下の船底に、船の神であるオフナダマを祀っている。船出や参詣、船下ろしのときには、このタツにアラシオと呼ばれる海水をかける慣わしがある。そこに立ってカツオを探す船頭自体も神格

化されていたと思われる。

さらに、以上のような由来譚をもつ疑似餌自体も神聖化されている。あるカツオ船が遭難したときに、生き残る可能性のあるカシキに、船頭がツノ（疑似餌）を与え、家族に渡してくれと頼んだ話もある。サモアでは、カツオの疑似餌は、他人に見せることさえいやがり、父から子へ漁業が受け継がれたとき、譲られた物の中で最も貴重視される⁽¹⁴⁾という。寺沢翁も「貴重な話」として、父親からこの「疑似餌のはじまり」を教えられている。

また、寺沢翁によると、カツオのツノになる鹿の角には、「落ち角」と「活き角」があったという。落ち角は、鹿が春になってバツケ（ふきのとう）を食べるころになると自然に落ちる角のことを指し、活き角とは猟師が撃った鹿の角のことを指している。とくに後者は、鹿の血がのぼせて角の中に入っていると言われ、カツオが一番捕れるツノになるという。

天明6年（1786）7月20日に、気仙沼湾の大島に渡っている菅江真澄も、カツオ漁の季節に到来した者として、「かつうををつる船」について触れているが、「かゝる舟にてのしわざは、かもしゝの角を、はりにすりてふくめの皮を、ちのもとにつきて、はるけき沖に出て、三尺四尺のいとをくだす、是を「角かけ」といふ⁽¹⁵⁾」と記している。ここでは、鹿角の擬餌針に付けるフグの皮を血のあるままに付ける工夫のことが描かれている。先に述べた、鎌倉市腰越でも、擬餌針は山で使う駄馬が傷めている血の混じった蹄が良いとされていた。

カツオの擬餌針だけではなく、カツオ自体も「血深い魚」だという言い伝えがあり、それがまた別種のカツオ命名譚と絡んでいるのである。

産忌由来譚をめぐって

カツオ漁では「産忌」と呼んで、ことのほか嫌っている禁忌がある。カツオ船の漁師が産忌などによって不漁が続いた場合などには、カツオの「食いが悪い」と言われた。万一、産忌に関わるようなことがあった場合には、船に乗る前にミアライ酒を飲んでから乗船したという。

なぜカツオ船では産忌に気を付けるのか、という理由については、気仙沼市唐桑町神の倉の千葉富嘉雄翁（明治41年生まれ）から、次のような話をお聞きしたことがある。

カツ（鰹）という名前を誰が付けたかといえば、神功皇后がいくさへ行ったとき、帰る途中に、その魚が飛び込んだらと。そんで、「皆さん、この魚、何という魚か知ってますか？」っ



写真4 神功皇后と武内宿禰とカツオを描いた絵馬
(宮城県気仙沼市の岩倉神社, 2002.4.7)



写真5 お腹を大きく描かれた神功皇后の絵馬
(秋田県大仙市の船玉神社, 2002.6.24)

て言ったらば、「わかんね」つつんだね。「ふんで、勝って帰ってきたんだから、カツ（勝つ）っついう名を付けますから」って、神功皇后が付けたんだそうです。

そして、その神功皇后が、いくさに行ったとき、そのとき妊娠して行ったもんなんだか、わかんねが、船で来る途中につき、子どもが生まれそうになったつつんだね。そんとき、家来ども、たくさん行ったべけんとも、一番近い武内宿禰つついう人がね、「まだお前が出てわかんねから出るな！家に帰ってから出べし」って、その弓の先でもって、押し込んでやったつつんだね。そして、それが麻糸ね、弓の糸、そんで子ども産まれたときね、ヘソをつむときは麻糸でヘソの緒つむんだ。そして、昔は、女がお産すつとき、必ずその麻で頭、結ったもんだ。そうして、家に帰ってから産まれた子どもが応神天皇様なんだと。(1990年6月9日採録)

唐桑の千葉富嘉雄翁は、この話を、カツオ船に乗った祖父の源左衛門から伝えられている。千葉家には、神功皇后の掛け軸を所蔵していたそうで、その掛け軸には、武内宿禰が産まれたばかりの赤子を抱いている絵も描かれていたという。気仙沼市本吉町の岩倉神社には、この神功皇后の凱旋とカツオの伝承を描いた絵馬が奉納されている(写真4)。また、秋田県大仙市協和の船玉神社には、お腹を大きく描かれた神功皇后の絵馬がある(写真5)。

昭和32年(1957)に宮城大島(気仙沼市)の崎浜の「忌」を調査した岡田重精は、「部落構造と儀礼—宮城県大島字崎浜の場合」の中で、崎浜の産忌について次のように述べている。崎浜も、かつてはカツオ一本釣り漁の盛んな集落の一つであった。

出稼漁業の家でも出漁中はかなり稀薄であり、最も忌が強烈に表れるのは出港からの帰港の場合であり、自宅に出産があり未だ「オビアケ」前であることを知ると当の乗組員は下船をしないか、しても自宅には入らず親類等に宿泊し出漁する。但し「オビアケ」まで滞在し得ることが確実ならば自宅に入り忌籠りに参加する⁽¹⁶⁾。

つまり、神功皇后の凱旋のときと同様に、カツオ船などの帰港のときの産忌に一番気を付けたものらしい。前述した神功皇后は、航海の守護神である住吉大神が憑いてから身ごもったという伝承があるように、船や魚の伝承に関わることが多いが、帰港と産忌に大きな関わりがあったと思われる。

しかし、富嘉雄翁の伝承だけでは、なぜ、カツオ船では産忌に気を付けるのかが釈然としないが、産まれそうになった子を押し込んだという弓の先に関しては、前述した、もう一つのカツオ漁の起源伝承とつながっているように思われる。産忌の由来譚で、産まれ出ようとした子を押し込んだ弓の先は、一方の伝承では、逆にカツオを呼び寄せる道具でもあったわけだからである。

産忌由来譚でカツオが船に飛び込んだということと、子どもが出たがるのを押し込んだこととは、おそらくこの話の中で対称的に扱われている要素である。同じ様に、弓先にカツオが集まるという伝承と、弓先で子どもを押し込むという伝承も、対称的な述べかたである。

ところで、沖縄県の本部町は平成22年(2010)までカツオ一本釣り漁を操業していたが、本島最後のカツオ一本釣り船、第一徳用丸の船主兼船頭の具志堅用権氏(昭和4年生まれ)から興味深い話を聞いたことがある。不漁が続いたときには漁を休み、船をきれいに洗って、フナダマ様にお神酒を上げるといふ。その理由は、船にカツオの血が付着して、その匂いを嫌ってカツオが寄り付かなくなるためではないかと説明をしている。船を洗った翌日には、すぐに大漁をして戻ってくる⁽¹⁷⁾ことが多かったという。

沖縄のカツオ船でのこの説明は、産忌の問題についても一石投じてくれると思われる。気仙沼地方には、産忌を「食った」者が釣るカツオはナマ(血)を吹くという伝承がある。岩手県普代村には「鰹釣には血忌を嫌ひ血忌のある人が釣ると鰹が血を吐く⁽¹⁸⁾」という同じ言い伝えもある。鎌倉市腰越では、「普通の魚の血は朝ついたのを夕方洗っても落ちる。カツオのナマは家に帰ってしきい⁽¹⁹⁾をまたぐと落ちない、それが舟で洗うと落ちる」といふ。

つまり、カツオ漁には、他の漁に比べて、魚が出す血の連想が強いのではないかとと思われる。魚の血のことをナマと言うのも、主にカツオの血についてのみ用いられている。一本釣りの最中には、カシキヤドウマワリなどの役の少年たちが、エサ運びをするのに、カツオの血でぬるぬるしている甲板を歩くことがたいへんだった話も、よく耳にしている。カツオ漁の産忌の強さと、このカツオのナマには、大きな関係があったものと思われる。

つまり、カツオのナマは死の血であり、人間の出産は生の血である。(船)と(家)とは対立されながらも類推して考えられがちであるが、同じ血であっても、船上における魚の(死)と家内における人間の(生)という対立も考えられる。少なくとも、神功皇后の凱旋した船での出来事のように、同じ船の上では同居できない要素であった。それは、カツオの血が家の中では洗い流されないというという鎌倉の伝承にも関わっているであろう。

一方で、気仙沼地方の漁家では、身ごもった女性に対しては忌むことをせずに、逆に「満船」にたとえて、船に乗せたりすることがあるが、子どもが産まれてからは、産んだ家を含めて1週間は接触しないようにした。千葉県銚子市外川でも、嫁さんの腹が大きくなると漁をするという言い⁽²⁰⁾伝えがある。

「産忌」の伝承、あるいは「産忌」に対する説明譚は、各地において様々である。福島県新地町

の釣師浜でも、大漁する船があると「あそこの家の嫁さんは腹ブック（妊娠）だから」と言われたものだという。しかし、子を産むと、船に乗ることを忌んでいても、急激に不漁続きになるとい⁽²¹⁾う。これは、女性の妊娠と海の豊漁とを重ね合わせた考え方である。また、新地では、実際にカレイなどの魚自体も仔を産むと、食べては不味くなり、値が下がる。逆に仔持ちカレイは特上ものとされている。産忌の由来が組み込まれているカツオ命名譚は、今後の研究対象としても可能性のある話なので、注意をしておきたい。

神功皇后と林慶業將軍

ところで、カツオをめぐる始原伝承には、多くの神話的な人物が登場するが、先に紹介した朱剛玄の『黄金の海・イシモチの海』には、「イシモチの群れの巡回は、実際の歴史の中で林慶業將軍^{イムギョソフ}という実在の人物と出会い、結果として林將軍堂という神堂をいたるところに伝播していくことになる。朝鮮と明・清の対立した国際関係の中で英雄神が出現し、その英雄神は漁民たちによってイシモチの神としてみな⁽²²⁾されていた」と述べている。韓国の伝説においても、「林慶業は潮汐の変化を利用してイシモチを護り、彼の兵士たちの食糧とした⁽²³⁾」とか「林慶業將軍は、茨の木でイシモチ⁽²⁴⁾を獲った」とも伝えられている。

ひるがえって日本のカツオの伝承と比較すると、いくつかの違いが見られる。一つは、カツオの始原伝承に関わる神は、源頼朝や北条氏綱など鎌倉を中心とした東国国家を代表する英雄神に近い実在の人物だけでなく、神功皇后・景行天皇・三島大明神・磐鹿六獨命など神話的な人物も含まれ、あるいは、一船頭が登場する伝承もあり、一定していないことである。

次に、これらの神は特別にカツオの神として大漁を願われることもない点である。さらに、韓国の林慶業將軍と相違して、日本の英雄神は、船に飛び込んできたカツオに出会ったり、偶然に弓弭を海に差し入れたところカツオが付いてきたと語られ、積極的にカツオを捕ったという伝承ではないことであり、それは日本の神々がカツオの神として敬われることがなかったことにも通じる。カツオ漁の始まりが、人為を介さない偶然であったことが、カツオ漁を典型とする、日本の漁業における自然観を示すものではないかとも思われる。

また、神功皇后の伝承を明治生まれの漁師が伝承していることには注意を要しておきたい。日本の教科書における神功皇后説話の記述を扱った金廣植は、教科書の神功皇后は新羅の王子天日槍の子孫であることをまず提出してから、「内鮮文化の融合に重点」、「内鮮融和を促進」するために登場させた⁽²⁵⁾という。神話学の松村一男は「明治維新以降、西洋での神話表現の豊かさに触れ、神話を国民教育の一環に組み込むことが意識的に行われた⁽²⁶⁾」と述べている。明治生まれの2人の漁師さんの、神功皇后とカツオをめぐる伝承には、このような、明治時代の国策的な影響が濃厚であったと思われる。

それが何故、カツオの始原伝承と結びついたかは分からないが、始原伝承に関わる人物には必ず、凱旋にしる、その後の勝利にしる、戦いに「勝つ」ということが要件としてあるようである。前述した、渋沢敬三がカツオは「堅魚」という宛字の以前から通用していた魚名とするならば、「勝つ魚」という語源解釈から生まれた伝承もあったことになる。

おわりに

カツオという魚は、その生食の由来譚や擬餌針の由来譚、あるいは産忌と関わる伝承などが多く、人間との関わりが深い、文化的な魚である。当初から、腐敗しやすく、鰹節などに加工しなければならなかった魚であったからだが、その腐敗しやすい原因の一つが「血深い」魚であるためである。なぜ、カツオが腹に当たると言われていたかという、それも「血合い」のせいだとされており、いまでもフクライなどの小さなカツオに対して、そう言う人々もいる。

カツオの生食の由来譚や擬餌針の由来譚など、この魚に人間の手が加わった由来を何故述べなければならなかったのか。季節をかぎって黒潮と共に到来するカツオに、自然に対する畏敬の念と同様の怖れで感じていたからであろうと思われる。そして、人間と同様に血をもっていることの印象的な魚であったことも理由の一つであり、それはクジラに対する感覚と、それほど離れるものではない。人間と海の生物との関わりを考える素材の一つとして、カツオ漁の起源伝承を採り上げ、若干の考察を試みたが、今後も「産忌」の伝承などを含めて考えていきたいと思っている。

註

- (1)——渋沢敬三「日本魚名の研究」『澁澤敬三著作集』第二巻〔平凡社、1992〕114p
- (2)——註1と同じ。15p
- (3)——朱剛玄『黄金の海・イシモチの海—韓国西海岸歴史民俗探訪』〔法政大学出版局、2003〕、原題は『イシモチに関する遐想—黄金の兜を被ったイシモチを待ちつつ』である。
- (4)——「貞丈雑記」『新訂増補 故実叢書 第十六回』〔明治図書出版・吉川弘文館、1952〕213p
- (5)——佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系39）〔岩波書店、1989〕193p
- (6)——宮下章『鰹節』（ものと人間の文化史97）〔法政大学出版局、2000〕197p
- (7)——土屋秀四郎『伊勢吉漁師聞書—鎌倉市腰越の民俗』〔神奈川県教育委員会、1961〕142p
- (8)——註7と同じ。140p
- (9)——佐藤孝徳編著『昔あったんだっ—磐城七浜昔ばなし三〇〇話』〔いわき地域学会出版部、1987〕209p
- (10)——矢代和夫、大津雄一訳『北条五代記（日本合戦騒動叢書13）』〔勉誠出版、1999〕203p
- (11)——註6と同じ。117～121p
- (12)——註7と同じ。119p
- (13)——註7と同じ。120p
- (14)——ホーネル・J「漁労文化人類学」藪内芳彦『漁労文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』〔風間書房、1977〕116p
- (15)——菅江真澄「はしわのわかば続」『菅江真澄全集』第十二巻〔未来社、1981〕47～48p
- (16)——岡田重精「部落構造と儀礼—宮城県大島字崎の場合—」『東北文化研究室紀要』第1集〔東北大学文学部東北文化研究室、1959〕462p
- (17)——2004年8月1日、沖縄県本部町にて聞書。
- (18)——柳田国男編『海村生活の研究』〔日本民俗学会、1949年〕354p
- (19)——註7と同じ。6p
- (20)——2002年11月3日、千葉県銚子市外川の田辺勝雄さん（昭和8年生まれ）より聞書。
- (21)——2018年5月26日、福島県新地町大戸浜の小野春雄さん（昭和27年生まれ）より聞書。
- (22)——註3と同じ。IVp
- (23)——註3と同じ。128p
- (24)——註3と同じ。129p
- (25)——金廣植「近代日本と植民地朝鮮の教科書と神話教育」石井正己編『2018年 日韓共同学会論議』〔東京学芸大学、2018〕164p
- (26)——松村一男「古典古代の神話教育」註25と同じ。134p

（東北大学災害科学国際研究所、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2019年5月24日受付、2019年8月5日審査終了）